城下の人

石光眞清

城下の人

石光眞清

龍星閣版

昭和三十三年六月五日 印刷
昭和三十三年六月十五日 発行
昭和四十六年七月二十日 六刷

定価七百五十円

著者 石光真清

刊行者 澤田伊四郎
東京都千代田区九段南四ノ八ノ三四

発行所 龍星閣
東京都千代田区九段南四ノ八ノ三四
振替口座 東京 三三六
電話九段(二六一)九二七二

印刷・精興社　製本・三水舎

城下の人

石光真清の手記

目次

夜あけの頃……五
神風連……一六
鎮台の旗風……四七
熊本城炎上……七〇
戦場の少年たち……八三
戦禍の中の人々……九九
焦土に来た平和……一二四
父の死……一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

自分の足で歩む道……一六六
東京……一八〇
若い人々……一九四
天皇と皇后……二三〇
出征の記……二四六
コレラと青竜刀……二六六
周花蓮……二八三
夢と現実……二九四

一、故石光真清が秘かに綴り遺した手記は、明治元年に始まり大正、昭和の三代に亙る広汎な実録である。これを公刊するに当って、年代順に整理編集し『城下の人』『曠野の花』『望郷の歌』の三著に分類した。

二、この三著は著者が自ら体験した事件と生活記録で、人生の機微にふれて余すところがないが、同時に著者が生きて来た「日本」自らの生活史であり、また東亜諸民族の歴史の歩みでもある。従ってこの三著はあわせて一巻として読まるべき意義と内容を持っているが、いわゆる小説における「続きもの」ではない。

三、『城下の人』は昭和十八年刊のものがその一部をなし、その他の大部分は未発表のものである。

四、『曠野の花』の大半は昭和十七年刊の『諜報記』が根幹になっているが、当時の社会情勢から発表を憚かられた部分と脱落していた部分を新たに追補して、全面的に再整理したものである。これによって手記本来の姿に立還ったので敢えて改題した。

五、『望郷の歌』は全篇未発表のもので、これをもってひとまず手記の明治時代を終る。

六、三著それぞれの書名、章題、区分はすべて手記によらず、また文体、会話、地名などは出来るかぎり現代風に改めた。

七、三著をなす手記と、それに関する資料は尨大複雑であり、もともと発表する意思で書かれたものでなく、死期に臨んで著者自ら焼却を図ったものである。その中には自分を他人の如く架空名の三人称で表はしたものさえ多く、その照合と考証に多くの年月と慎重な努力を要した。従って焼却された部分や脱落箇所の補綴や、全篇に亘っての考証は、編者（嗣子石光真人）が生前の著者から直接聞き正し、また当時の関係者から口述を得たものによって行ったほか、生前の著者を知る多くの人々の協力によって、こゝに全容の完成を見るに至った。しかし事実を述べるに、なんらの作意を弄せず、私見もさし挿んでいない。

夜あけの頃

一

私は時代的にも、家庭的にも、光輝ある年に生れた。

父（口絵写真）はその頃、熊本細川藩の産物方頭取として全盛の時代であり、藩公から頂戴した御殿跡（現在の熊本市本山町南御殿跡六七四）に居を構えて、明治の新政を迎えた。

鎖国日本三百年の扉は、志士たちの手によって押しひらかれ、錦の御旗が新時代の足音に囲まれて、東進しようとする明治元年八月三十一日、私は生れたのである。

両親は私の出生を悦び「忠三」と名付けて大そう可愛がり、大切に育てられた。それもその筈である。私の家では、長女真知子、次女真佐子、長男真澄の後、次に生れた次男は生れるとすぐ死亡し、三男安熊もまた四歳で早死にしたのである。その後に生れた私である。特別に愛されるのは当り前かも知れない。

両親は勿論、同居のお寿加伯母さんも、子守女のミサも、下男の次太郎も、私を奪い合うように、抱いたり背負ったりして、笑ったと言っては悦び、喋ったと言っては笑い、片時も下へは置かないようにして育てられたということである。殊に子守のミサは、いつも私の側にいてお守りをしてく

れた。

ミサの家は私と同じ本山村（現在の熊本市本山町）にあって、父は徳兵衛と云い、正直で仏のような男であるが、一向に働きがなく、そのためひどく貧乏で、その日の暮しにも困るほどであった。こんな徳兵衛の何処が気に入ったものか、私の父は不思議なほど可愛がり、暮し向きにまで立ち入って世話をしていた。そして娘のミサが十三の時、私が生れたので子守として私の家に引取られて来たのである。

ミサは私を心から可愛がるし、私もまたミサになついたが、私が三歳になった明治三年の秋、父の友人で熊本屈指の醸造家として、新町の一角に宏大な店舗を構える木津屋の主人源太夫が、私の家に遊びに来て、ミサの働きぶりにすっかりほれ込み、ぜひ自分の家の女中に欲しいと父に懇望し、とうとう一緒に連れて行ってしまった。私は遊び相手を失って淋しさに捕われた。そのためではないだろうが、死んだ兄と同じように医薬の厄介になり勝ちとなり、明治四年、やはり四歳の時に「ジフテリヤ」に罹ってしまった。その時分ジフテリヤのことを「ノドケ」と言って、まったく治療の方法がなく、ノドケといえば、医師は申訳けに投薬はするが、ほんの気休めでたゞ死が来るのを待つに過ぎなかった。しかも、この病気は幼児に多く、死ぬまで大変に苦しむ。内臓には異常もないのに、咽喉だけが詰ってゆくのである。丁度咽喉をやんわり絞められるのと同じで、無心の小児も呼吸困難になるにしたがって、小さな身体を悶き苦しむ。ついには、ぱっと無意識に跳ね起きたりする。このように苦しむわが子の姿を、親はどうしてぼんやり眺めていられよう。

この時、私の母（口絵写真）は、弟の真臣を姙娠中で、しかも八ヶ月目になっていたから安静にし

なければならないのに、そんなことには頓着なく、私を抱寝して食事も寝たまゝ幾日も握飯で済ました。父もまた、枕頭にすわって、次第に生気を失ってゆく私の顔を見守っていた。

——もう駄目だ。

と深い吐息とともに、私の生についての望みを断ち、たゞ臨終を楽にさせたいと、それのみを祈っていたのである。

私の病気は、私の咽喉を次第に詰らせてゆくように、また両親の胸をぐいぐい締めつけて悪化するばかりであった。もはや藻掻く力もなく脈搏も細り、呼吸も殆んどあるかなしかの状態となって臨終が迫った時、母は私を抱寝したまゝ、無心に枕許のあちこちを見廻した。

丁度手の届くところに硯箱があった。その硯箱の中に筆がはいっていた。硯箱に筆のあるのは当り前で不思議はないが、たゞ違うのはその硯箱は、父が大切にしていた持物で立派なものであった。母が寝たまゝ、手を差し伸べ、硯箱を引き寄せたのを見て父は驚き、

「守家(もりえ)、何をするのか」

と不思議な面持で訊ねた。夢中の母は黙ったまゝ筆を取出すと、急いで先の毛をむしり取り、竹の軸ばかりにして、それを私の口へ差込み、一方を自分の口にくわえて、私の咽喉に詰っている痰を自分の口へ吸い取った。

臨終の瀬戸際にあった私は、痰を取除かれると、また幾分か呼吸をするようになり、有るか無しかの脈搏も多少力が増して来た。私が息を吹返したのに力を得た母は、更に筆の軸を口にくわえて咽喉の痰を吸い続けたのである。何回か繰返されているうちに、私は唇をぴくぴくさせた。父は驚

きかつ悦び、同時にあきらめた私の生について一縷の望みをかけた。

やがて私は手を動かし、間もなく身体も動かし始めた。父はその都度驚き、涙を流して悦んだ。母は驚きもせず、悦びもせず、黙々として私を抱き寝したまゝ、様子を見ては筆の軸を銜えて私の痰を吸い続けたのである。そして二昼夜、とうとう一睡もしないでそれを続けたとのことである。その姿が、慈母観世音のように尊いものに見えたとは、父が後に述べた思い出である。

私はそれから二日目に目を開いた。三日目からは痰のからまりも少なくなって、それと同時に首の両側に大きな腫物が出来た。医者は私の家と同じ本山村の寺島先生で、匙を投げていたのに、この経過を見てびっくりした。母の取った冒険的な処置については「尊い母性愛に感じて仏が母体に乗移られたのでしょう。」と言った。

父もまたその間、私の枕頭にあって経過を見守っていたのであるが、私が元気付いて目を開いたのに安心して、二日目の夕方はじめて就寝した。心も身も疲れ果てていたからであろう、すぐに夢を見た。夢の中に熊本城の築城主、加藤清正公が現れて「この子の病気は必ず全快する、決して心配するに及ばぬ。」と言い残して姿を消したとのことである。父は、はっとして目をさまし辺りを見廻して夢であったことを知った。父は相当学問もしていたし、進歩的な、理性に勝った性格だったから、迷信じみた夢物語はひどく嫌いだった。神や仏の話も好まなかったが、子供のためには親は盲目になるもので、夢枕に立った清正公のお告げが無性に有難く、いま寝たばかりなのに早速起き出して、本妙寺の方向に向って合掌してから、私を抱き寝している母に「守家、わしは今、有難い夢を見た。忠三は今日から清正公の正の字を頂戴して正三と改名する。」と言って再び床につい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

その翌日、寺島先生は私の首の両側に出来た腫物を見て、携帯して来た薬籠から外科道具を取出し、切開したら多量の膿が出て、それからは日に〳〵快方に向い、一ケ月を経過した頃からほぼ前通りの健康体に復した。

二

私の生命は偉大な母性愛によって継ぎ得たのである。その恩愛の深さ、高さ、たゞたゞ涙がこぼれるばかりである。

親の恩は海よりも深く、山よりも高いというが、その深さは測り知ることができない、その高さは仰ぎ見ることができない。親は子のためには身を捨て、身を抛って庇う。その愛情は絶対である。母が私の苦しむのを見るに忍びないで、痰を吸い取って苦痛を減じた如きは、全く母性愛の極致といえよう。万一母のしたこの冒険が、かえって私の命を奪う結果になったとしても、私は無意識の中に温かい愛情を感じながら死んで行ったに違いないと思う。

私は幸いにも母の愛情と冒険によって救われ、一ケ月後には父に伴われて清正公を祀る本妙寺に御礼に行った。暫くぶりでお寿加伯母さんから、きちんと稚児まげを結ってもらい、黒紋付に袴をはき、朱鞘の刀を差した時は無性に嬉しかった。

私はまだ昔に変らぬ武士姿であるのに、父はもう髪を短く切った「ざんぎり頭」であった。父の

思想は時代に伴うというよりも、むしろ時勢よりも一歩先に進んでいた。

明治維新後、熊本藩の産物方頭取の御役御免となって、暫く家に遊んでいたが、その後帝都となった東京の情況を視察するため上京した。当時東京には父の実弟の野田豁通（野田家に入籍、後の男爵陸軍主計総監）もいたし、同郷の友人も随分多く官途についていた。父が曾ての熊本の富商、万五郎、伊平、佐平等を伴れて東京に出たのは、明治三年三月の中旬であった。父たちの一行が、其処に見たものは、熊本での想像が思い過しでなかったことを立証していた。と云うよりも、むしろ想像以上の時代の変化に驚かされたのである。政治も経済も、新しい国家的基盤の上に、どしどし改造され、増築されて、仰ぎ見るばかりの骨組を見せていたのである。

これにも増して、父の新しい決意を促したものは、官界が全く薩長土肥の四藩士に占拠されていたことである。維新の大業に際して、藩内の意見が一致出来ないで、新政府に参画の好機を逸した熊本藩士は、もう這いこむ隙もないまでに、落伍している事実を、はっきりと知ることが出来た。

……かくなる上は、われわれは、野にあって、実業界と言論界に発展するほかはない。四藩の後塵を拝して、何になろうぞ。

と、一行は米穀取引を中心に、新しい経済機構の見学、研究に専念した。ひと通りの調査も済んだので、父は熊本に米穀取引所を設ける準備のため、万五郎等を、先に帰郷させて、ひとり踏みとどまった。

ところがこの在京中に、大蔵省出仕の実弟野田豁通から、一時官途に就くよう勧められた。赴任地は登米県（現在の秋田県の一部）で、大参事（知事）には同郷の嘉悦房之が就任するから小参事（副知

事）になってはどうかと云うのであった。

「薩長土肥の四藩に官界が占められておることは、兄上の云われる通りですが、新政府の経済についての施策は、まだ定まっておりません。朝令暮改が多く、うっかり手を出して、取返しのつかない事になりかねません。今しばらく、時機を待たれては……」

と熱心に父を説いた。父もその熱意にほだされて、秋田に赴任したのは雪路の十月であった。めったに、雪を見たことのない父、しかも腺病質の父にとって、雪国の鉛色の空は堪えられなかった。しかも、中央と余りにかけ離れており、熊本の方が、はるかに進歩していたから、一時代、過去に抛り出されたようなものである。

……これでは、世の中に遅れるばかりだ。経済の秩序が定まるまで待てと云うが、それは兄を思う弟の情からで、まことに有がたいことだが、しかし商と云うものは、世の安定しない時に基礎を作らねばならぬものだ。こうして碌を食んでいることは、一日過ぎれば、一日の損である。

こう考えると、忍び難くなって、一年を待たずに、翌明治四年七月、辞表を出して熊本に帰った。帰って見ると、僅か一年であったが、郷里の移り変りも目立っていた。上京の際に伴れて行った万五郎や伊平も、熊本では新知識として迎えられ、それぞれ商売に成功していた。父も新事業の準備にかゝっていると、旧藩主細川侯家から使者が来て、丁重な口上で呼び出された。このような丁重な態度は、旧藩時代には考えられないことであった。伺候すると、父にヨーロッパに渡航して実業方面の調査をしてもらいたいとのことであった。普通の人なら、直ちに承諾したであろう。ところが物堅い性格の父は、登米県小参事の辞表を出しっぱなしで帰郷し、まだ允許の辞令を戴いていな

かったので、如何いたしたものでありましょうかと申しあげた。大政官の新しい権威に服していた細川家は討議の末、中央に対して遠慮すべきであるとの結論になって、この話はお流れになった。

定まった仕事もない父であったが、旧藩時代の職から離れた親族、知己の暮しを立てるために多忙であった。藩時代の裁縫方には軍服製造を、技術のない者には塩田の開発や、養蚕、製茶など、父自身も大して知識はなかったが、進んで研究し、一緒になって指導したが、なんと云っても武士の商法……十に八つは失敗を重ねて行った。総ての旧藩士は、この例に漏れず辛酸を嘗めていたのである。ある者は世を慨き山に籠って炭を焼き、ある者は転々と職を変えて屠殺業にまで転落した。旧藩士の主だった人々の姿が、ぽつぽつと熊本城下から消えて、無人の邸内には夏草が生い繁った。

三

熊本旧藩士たちは生活の前途がまだ八分通り定まらず、あれこれと馴れない仕事に手を付けて貯えを失って行った。軍も官も、ともに薩長土肥の四藩士に占拠されて、分け入る隙もなかった。

このような熊本にも、容赦なく新時代の風は吹き、西洋文明が流れこんで来た。こうなると、維新の際にも纏らなかった旧藩士の思想は、いよいよ、はっきりと分裂、抗争の様相を明らかにしたのである。

学校派、実学派、敬神党など、旧藩士を中心に新旧二つの思想が渦を巻いて、いろ〳〵の党派が出来、騒然たるものがあった。兵制が布かれてお城に鎮台(師団)が設けられ、商人や農家の子弟が

つぎつぎに召されて西洋風の軍装に刀を佩し、今までの自分達の地位に代ってゆくことが、士族達に堪えられない衝撃を与えた。けれども父は、そうしたことに全く耳を傾けないで、いつも議論の圏外に立っていた。そして「散髪略服脱刀勝手たるべし」の太政官令が出て間もなく、卒先して佩刀をやめ、角帯を兵児帯に代えてしまった。本山村の人々をはじめ、道行く人々もびっくりして振返って見たほどである。

しかし、子供の私と弟はまだ昔に変らぬ結髪帯刀の姿であった。私はざんぎり頭で丸腰の父に伴われて、病気全快のお礼のために本妙寺の大きな山門をくぐり、御堂の前に来ると、父は「清正公が夢枕に立たれてお前の生命をお守り下された、お礼を申上げなさい」と言った。私は手を合わせてお祈りをした。父もまた瞑目して長いこと合掌した。家に戻ると、父は平服に着替えて、暫くぶりに庭に出た。私の病気がすっかり快方に向って、もうこの分なら絶対に心配がないと医者も断言しているので、父は心から安心している様子であった。

私の家の庭の中央に、大きな欅(けやき)の木が一本あった（口絵写真）。欅は熊本地方には珍しい樹木で、それがまた三抱え以上の大樹で、空に聳えていたので、村の人達は勿論、通りすがりの人々も仰ぎ見るのが常であった。それが父には非常な自慢で、毎年秋の枝下しに植木屋の辰五郎がやって来ると、自分が指揮して風致を損ねないように注意するほどであった。庭に下りた父は、例によって欅の大樹を仰いだり、築山に登ったりして、もうぽつ〳〵色づき初めた庭木を見廻しているうちに、南側の隣家との境の杉の生垣の根元に欅の実生が一本生えているのを発見し、足をとめて眺め入った。その実生の欅は、大樹に蔽われて日光の恵みに会わず、日蔭の悲しさを歎くようにひょろひよ

ろと長く伸びていた。
父は私を顧みて
「正三、この欅の木は、お前の今の容体そのまゝだ。よく似ておるなあ」
と笑った。
「まだ四年ぐらいのものかな？　お前の生れたころに生えたものだろう――お前の回復の記念に、この欅を日光の当る場所に移して、大切に育ててごらん」
と父は自分で鍬を取り、根を傷めないように掘り起して日当りの良い庭の西隅に移植した。植え終ると、手を洗ってから欅の大樹の下の祠の前に進み、ぱん〳〵柏手を打って礼拝した。この祠は、私が病む一月ほど前に建立された二尺四方ぐらいの小さなものである。宮造りの屋根もちゃんとついていた。
そのうちに兄の真澄も姉の真佐子も庭に出て来た。
「今日はお前方にこの欅の話をして置こうか……こゝにはもと細川諦了公さまの御殿があった。それでこゝを今でも御殿跡というのだが、この欅の木は、熊本には珍しい樹で、藩士が珍木として献上したのを諦了公さまがお手植になられ、公御自身、暇をみては庭に出られて丹誠されたものだ」
「このお屋敷をどうして拝領することが出来たのでしょうか」
と兄の真澄は初めて聞く話にびっくりして訊ねた。
「うむ、お前も知っての通り石光家の身分は軽かったが、他の軽輩どもと違って、細川公が肥後入国の時からお供をした家柄だ。しかも代々、殿のお側に奉仕していたから特別のお取扱いを受け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com